

佛光山は救援物資を震災地に送り、被災者の需要を確認

【人間社記者心元 日本仙台報道】2011/03/25

日本本栖寺住職満潤法師、東京佛光山寺住職覚用法師、大阪道場監寺如愷法師、国際佛光会幹部白文美さん達は3月24日早朝、宮城県仙台市へ出発した。

途中、目にしたのは救援物資を運ぶトラックや記者などの公務車であった。今回駐日代表処のご好意を頂き、東京佛光山寺は通行証を取得することができた。佛光人の「愛心」である65トンの救援物資の運送状況、及び被災地の需要物質を確認するため、24日に仙台市、名取市、亶理郡山元町へ行った。

当地のNPO法人の協力を得て、22日に成田、23日に羽田から輸送した救援物質は23日及び24日に宮城県の気仙沼・南三陸町及び岩手県遠野の今まであまり注意が届いていなかった避難所に到着していた。



避難所の状況を更に知るため、伊達藩礼儀作法の講師である池田峯公氏に依頼し、仙台市若林区の避難所へ連れて行って頂いた。出発する前日、覚用法師は被災地の方々がビタミンを必要としていると思い、蜜柑10箱と出来立てのパンを1,000個用意して持っていった。11時30分頃、パンと蜜柑を持って若林区の避難所に到着した。列に並んで昼ご飯を受け取っていた方々はパンや蜜柑を見て、嬉しそうな表情をなされた。ボランティア達の話によると、この地区では400人が亡くなり、七郷小学校では現

在400名余りの被災者を受け入れているそうである。付近の住民を含むと800人以上の食糧が必要である。市区に近いため救援物資事情はまた良い方だが、市区から離れていたり、交通が寸断している避難所は食糧がまだ不足している。この状況を国際佛光会は当地のNPO組織に伝え、協力して頂いた。

その後、中央通社記者楊記者の案内で、仙台市から38キロメートル離れている仙台空港付近の名取市の被災地へ向かった。そして、被災者が実際に必要としている物を知ることができた。この件では楊記者に大変感謝している。

先ず、山下小学校に到着すると、校門には「野外入浴所」という看板が置かれていた。門の入り口には何人かの小中学校生が座って送迎車を待っていた。子友達に聞くと、何人かはお両親を亡くし、今は祖母と暮らしているそうである。学校がいつから始まるかと聞いてみたが、知らないという答えだった。入浴を終えた数人の中に、頭にタオルを載せ、ゆったりとした表情で歩いてくるお婆さんがいらした。自衛隊が被災者のために風呂の用意をしたのだった。これで少しでもストレスが解消できることを願う。





次に、山元町体育文化センター避難所へ行った。責任者である佐藤総務課長の話によると、毎日朝晩4、200人分の食事を用意するが、避難所に住んでいる人は1、200人であり、その他の住民は断水や停電で自炊ができないため、避難所に食事を取りに来ているということである。食事の用意は自衛隊が協力して作っているが、調味料が不足していた。震災からもう14日目、佐藤氏は髭の伸びた疲れた顔と赤くなった目で語った。

「団体生活で清潔を保つため、使い捨ての容器を使っているためにごみが大量発生している。できるならば、皆様に自身の食器を用意し、各自で保管してもらえたらいいのですが。」

満潤法師は25日早朝、東京に戻って直ちにそれらの買い出しを佛光人に要請した。26日に30箱の漬物、126箱の様々な調味料及び30箱のご飯を発送する予定である。それを佐藤総務課長に連絡したところ、ひどく感激なさっていた。



2キロメートル前の道の端は臨時遺体収容所になっていて、死臭が遠くまで漂っていた。浜辺に行けば終わりのない廃墟、根元から引き抜かれた海岸線にあった樹木、引っくり返った車、屋根しか残っていない家……、元の村の様子はコンビニ、レストランの残骸から分かるだけである。完全に变形した線路の枕木、レール、村の半分はまだ水の中である。荒れた地にたたずむと、止まない冷たい風と悲しい思いが……。「慈悲偉大なるお釈迦様！ご加護をお願いいたします。」生き残った方達に再起の勇気を与え、亡くなられた方達が仏の国に往生し、それぞれが蓮の台に登らんことを願うばかりである。

